

赤潮貝毒監視事業報告書（要旨）

（毒化モニタリング）

プランクトンが原因となって貝類が毒化する現象は、ホタテガイのみならず近年では西日本のアサリ、カキ、ヒオウギ、日本海のムラサキガイさらには一部肉食性巻貝にも認められるなど、その多様化、広域化が進んでいる。

この事業では水産庁の補助を受けて、浦ノ内湾産アサリの毒化監視と毒化関連プランクトン調査を行った。

1. 調査の内容

平成3年2月から7月の間、浦ノ内湾の二定点でアサリについて麻痺性貝毒及び下痢性貝毒を計8回、総数8検体を検査した。また、毒化関連プランクトン出現数調査及び環境調査を実施した。

2. 調査結果の要約

- 1) 貝毒検査の結果、対象種であるアサリについて麻痺性貝毒、下痢性貝毒のいずれも検出されなかった。
- 2) 毒化原因プランクトンの調査では、*A. tamarense*は4～6月にかけて、100 cells/ℓを越える密度がみられ、最高は6月10日の640 cells/ℓであった。また、*A. catenella*は2～4月にかけて出現盛期が認められ、6月にも260 cells/ℓの密度がみられた。
- 3) *Dinophysis*属では、*D. fortii*は最高でも20 cells/ℓの密度にとどまったが、*D. acuminata*は6月以降100 cells/ℓを越える密度がみられ、最多出現数は7月8日の270 cells/ℓであった。

